

第 24 期 日本学術会議 総合工学委員会 未来社会と応用物理分科
会 第 1 回分科会議事録

1. 日時 2018 年 1 月 30 日 (火) 10:00～12:00

2. 場所 日本学術会議 5 階 5-C(2) 会議室

3. 出席者 (敬称略)

中野 (東大)、松尾 (法政大)、伊藤 (慶大)、金田 (富士通研)、桑野 (阪大)、小長井 (都市大)、澤木
(愛知工大)、瀬山 (NTT 研)、玉田 (九大)、為近 (横国大)、根本 (NII)、平尾 (東芝)、平岡 (東芝)、
藤原 (NTT 研)、堀 (名大)、百瀬 (国立交通大)

4. 資料

資料 1 分科会名簿

資料 2 分科会設置趣意書

資料 3 学術会議会長、副会長、第三部役員リスト

資料 4 第三部関連分野別委員会、関連分科会

資料 5 第 23 期 未来社会と応用物理分科会の活動状況

資料 6 第 23 期 未来社会と応用物理分科会第 6 回分科会議事録

資料 7 第 22 期 未来社会と応用物理分科会活動記録抜粋

参考資料

1 公開シンポジウムポスター「科学と産業の凋落と再興」(平成 28 年 3 月 19 日)

2 公開シンポジウムポスター「いま問われる研究業績評価」(平成 29 年 3 月 17 日)

3 公開シンポジウムポスター「日本の科学と産業の停滞と復興」(平成 29 年 6 月 22 日)

当日配布資料

1 関連分野における提言、報告、記録等

5. 議事概要

議事に先立ち自己紹介が行われた。

議題 1: 学術会議 24 期の体制について

世話人から資料 2 に沿って分科会の趣旨、そして、資料 3 と 4 に沿って学術会議 24 期の体制が紹介され
た。

議題 2: 役員を選出について

互選により、松尾委員長 (法政大) が満場一致で選出され、委員長指名により中野副委員長 (東大)、
為近幹事 (横国大)、伊藤幹事 (慶大) 選出された。

議題 3: 経過報告

中野副委員長より、公開シンポジウムを中心に前期の活動が報告された。また、前回議事録から申し送
り事項が紹介された。「(以下、前期委員会議事録から抜粋) 今期は、なぜ日本の科学と産業がペースダ
ウンしているかについて定量性も含めて状況を把握することに努めた。今期で状況把握ができたからに
は、この理解を次回につなげる必要がある。応用物理として日本学術会議で議論を重ねて提言につなげ
るテーマはなにか? 環境はひとつであるが、来期は提言をするということで、実際のアクションを来期
は考える必要がある。」

議題 4: 第 24 期の活動方針について

- 提言を出すかを早急に検討する必要がある。様々な分科会から提言がすでに出ているので、それとの

差別化に加えて、すでに出ている提言の実行・実現につなげるフォローアップが重要

- 提言をするのであれば今から決意する必要がある。全体的に夢のある提言にもっていくべき。地方大学・私立大学活性に関する提言を検討してほしい。博士進学による明るい未来を示してほしい。
- 私立大学によって立場・現状が異なるので、私立大学としてすべてをくくる議論は避けるべき。重要なのはポストク・リサーチアソシエートの状況改善に関する議論。博士課程の学費・在籍料の無償化も含めて、博士課程の活性化が大切。そして提言を出したからにはそれを実現するフォローアップが大切。
- 博士進学者が少なすぎる。博士に進学しても、その次の就職先が少ない。受け皿を準備すべき。また、長期的な研究が実施しづらくなっている。そのようなシステムを国がつくるべき
- 最近企業が博士を採用する流れができつつある。日本の研究開発力の低下は、研究費の行き過ぎた選択と集中に起因するところが大きいと思う。これについては、他の分科会も同じ問題を議論していることが予想されるため、この議論は、他分科会と協調することにより影響力の拡大を図るべき。提言をするのであれば、未来社会と応用物理の特徴を出したい。実現性は定かでないが、応用物理らしく新しい融合領域の提案や、応用物理がつくる未来社会のビジョンを示す内容がよいと思う。
- 若手研究者と一緒に彼（女）らの近況や考えていることを議論する会に出席している。そこで実施しているのが委員会に文科省の若手のお役人さんをお呼びしてコミュニケーションをとるということ。これは非常に良いので本委員会でも実施したらどうか。また、若手は様々な雑務に対する不満を持っているようで、その原因の一つは、若手教員の評価方法が現状に即していないからと感じる。評価を議論するのはどうか。
- 博士育成に関しては国内に閉じた議論ではなく、グローバルに就職先を目指す議論が必要ではないか。
- 前期はどちらかといえば「凋落」すなわち反省を重視した感があるが、今期は未来志向の夢のある議論をするのはどうか？誰もが自分の置かれた立場に照らし合わせて参考にできる内容が良い。また、若手に対する印象も含めて、思い込みに基づく議論は危険なところはある。
- 未来社会の描像を総合工学・応用物理という観点から示すことができれば楽しいと感じる。博士課程に関しては、企業に入ってから研究を行って博士をとる選択もある。学生が博士課程に進学しないのは構造的な問題もあるのでは。一度社会人になった人が学び直して博士号を取得する道をデザインしていくのがよいのでは
- この分科会から提言を出すのであれば、応用物理にこだわるのがよい。前回のシンポジウムで発表していただいた若い方々は元気があり高い実力を有する方々だった。ただ、もう少し、多くの若手が共感しやすい身近な議論をするのも一考。
- 前期の議論によって、日本の学術の凋落の原因が明らかになったので、次は未来に向けた提言が必要。提言がどうすれば実現できるかの提言が必要。個人的には地方大学の活性化に関する提言が大切だと考える。乱暴な例かもしれないが、例えば大型予算の申請には地方大学を含めるといった施策の提言を検討するのはどうか。研究資金の出資源を国だけに求めるのではなくグローバルに探索することが大切なのでは。また、教員の教育に関しても考える必要がある。
- 社会の進化に伴い、過去の成功例に基づくシステムを参考にして新しいシステムを提言することは難しくなっている。未来社会と応用物理に関しては、例えば、軍事との関係といった避けがちな議論に正面から向き合うべき時期を迎えている。そういった本質的な議論を避けていては若手からの信頼も得にくいであろう。
- 博士課程進学者が少ないことに関しては、授業料支払いなどのシステム的な問題のみではなく、大学教員の対応やあり方に関する側面も議論して課題を明らかにする必要がある。職場において、未来社会のための技術としていきなり突飛なことを言ってもなかなか受け入れてもらえない風潮がある。しかし、将来を切り拓いていくためには、新しいビジョンを形成することが大切で、その参考になるような議論をここでするのもいいのではないか。
- 多くの議論の効果はタイミングが大切であり、一部の議論はスピードが大切である。そのようなタイミングを重視した議論のアウトプットを考えて欲しい。
- 提言は施策に反映させるために出すのであろうが、それを読んだ人々が自分の職場や教育・研究分野の向上に使えるものであればなおよい。
- 提言は施策に反映させるためのものであるが、参照基準という観点からは例えば高校の教員といった多くの教育関係者に読んでもらいたい側面もある。提言の実現に関しては学術会議全体で議論されているところである。
- 全体の議論から、前期の活動を参考にして提言をまとめていくという考え方と、応用物理に基づく未

来志向の提言をまとめるという考え方があるようだ。提言をまとめるのであれば、その両方を包括しながらまとめることになるのでは。

以上の議論をもとに、今期は提言をまとめることを目標とし、そのための議論を積み重ねることになった。議論は委員会で重ね、提言を作り込む時はワーキンググループの設置も検討する。

以上（伊藤記）